

受講番号 18050 学校名 高知商業高等学校 氏名 川村 美穂

## 研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年2H 生徒数 36 名  
 科目名 英語 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW STREAM (増進堂)

## クラスの様子・特徴

商業高校における各種検定取得を目指す学習意欲の高い生徒が多く、授業規律や提出物など基本的な学習習慣が確立している。授業に対して非常に真面目に取り組むことができる反面、英語に限らず自己表現やコミュニケーションに対して消極的な面が見受けられる。

## 問題の確定

学習した文法や構文をコミュニケーション活動に活かすことができない。自分のことを英語で表現することに対して消極的である。

## 予備調査

## A 授業の観察

語彙力の向上と基本的な文法事項の復習への取り組みは良好である。しかし、英語で自分の意見をまとめたり相手に伝えようとするコミュニケーション力を問われると十分に力を発揮できていない。

## B 生徒による授業評価

アンケートの結果、日常会話程度のレベルの英語を身につけたいと考えている生徒が多い(35%)。また、文の構造がわからず、英作に課題を抱えている生徒がいるため、「授業で文法を丁寧に指導して欲しい」という意見が多い。

## C 学力データ

定期テスト・熟語テストから読解力はあるが、語順整序など文の構造を理解する力が弱いことがわかる。語彙習得においても、発音はできて正しいつづりで単語を書くことが苦手である。(データは別紙参照)

## リサーチ・クエスチョン

学習意欲の高いクラスで、どうすれば文法や構文の知識を活用して、自己表現力を伸ばすことができるのか。

## 仮説・実践・検証

## 仮説1

導入時に雰囲気作りを兼ねて、ゲームの要素のあるペア活動を取り入れることで、積極的に自分を表現しようとする態度が養われるだろう。

## 実践1

2時間に1回程度、2人組で季節や時候にちなんだ日本語をジェスチャーを用いず英語で説明させた。慣れたきたら、語句から文へと発展した課題を与えた。キーセンテンスを制限時間内に列ごとに後ろの人に口頭で伝え、最後尾の人は伝った内容(文)を紙に書き出し、正答を列ごとに競わせた。の活動はともに1～2学期末まで実施した。

## 検証1

ともにペアやグループ等、集団を必要とする活動であることから、それまで授業に積極的に取り組むことができなかった生徒も含め全員参加の授業が行えるようになった。また、2学期末のアンケート結果から、これらの活動を通して授業で学んだ内容(単語・文法・構文)が有機的に関連していることに気づき、授業そのものに対して興味や関心を持って取り組むようになった。

## 仮説2

洋楽を聴きながらディクテーションすることによって、授業において取り扱う文法事項や構文の実践的な運用例を理解することができるだろう。

## 実践2

授業の導入として2時間で1曲の洋楽を聴き、歌詞のディクテーションを行った。選曲も「動詞編」「名詞編」「使役動詞編」「現在完了編」とテーマを持ってできるだけ既習事項が整理できるように歌詞の空所補充の問題を工夫した。1時間目はヒントなしで聞き取り、2時間目は語句の頭文字や対訳のヒントを与えるなどして、最後に答え合わせを行った。

## 検証2

まとめのアンケートから、歌詞に出てくる口語的表現や言い回し体験的に学ぶことができたという感想が多かった。また、ディクテーションシートの採点を毎時間ペアで行うことにより、お互い聞き取りの出来ばえについてコメントを出し合ったり、曲の印象について意見交換したりすることも良いコミュニケーション活動になった。

## 仮説3

教科書の各単元を学習した後、「I」を主語にミニレポートやワークシートを作成することで、自己表現力が伸びるだろう。

## 実践3

「自分の名前の由来」・「子どもにつけたい名前とその理由」・「もし自分が楽器を習うなら…」等をテーマに、一問一答式のワークシートやミニレポートを宿題とした。自分の意見を述べるための"I think..." "I believe..." "I would like to..."などの基本的な表現例を授業の中で説明し、確認を行った。その後各自で辞書を活用し、完成後、提出させた。(語数制限なし)

## 検証3

はじめ生徒は英語で自分の考えや意見を表現するときに、文法的な問題によって言いたいことが大幅に制限されていた。しかし、ヒントや表現例を提示すれば、大半の生徒は自分のことばで何とか書こうとする努力が見られた。ただ、語数指定をしなかったため、1,2文程度の答えしか書かない傾向も見られ、量的・質的な面で自己表現という点には課題が残った。

## 研究の成果

今回の3つの検証を通して、実際に英語を使って書いたり話したりするコミュニケーションの場面を多く授業の中に取り入れることにより、少しずつ生徒には自分を表現していく積極的な態度や姿勢が身についている。教科書で扱われていない、実践的な課題を多く提示することによって、自分が知っている単語や文法、構文などの知識を活用し、コミュニケーションにつなげていくという努力が大半の生徒に見られた。また、検証のために行った様々な実践がペアや集団を通しての活動であったことから、生徒同士の良好な人間関係を築くことにつながったことがこのARの大きな成果であると感じる。

## 今後の授業改善の課題

そもそも「自己表現力」とは何か、何をもちて自己表現ができるようになるのかという定義と、より具体的な仮説を立てることが課題である。今回のARを通して、文法や構文といった基礎力が必要であることを再認識した。そういった基礎的な部分の指導を継続しながらも、ある程度のまとまりのある文章を書いたり話したりできるよう、量的な面での向上を目指したい。そのために、家庭学習を多く促す授業実践を行いたい。